

## 「広尾 sky color」(広尾の掌編小説8)

あらかじめ野菜をとろ火で煮込み終わるとコンロを止めた。味醂<sup>みりん</sup>とお醤油、そして砂糖のまじり合った香りがリビングにまで広がっていた。炊飯器からはふわり蒸気がたちのぼりはじめている。

窓から見える空は淡黄<sup>たんき</sup>にぼやけてまどろみながら暮れていく。額縁のような南向きのおおきな窓に右端から西日が差していた。

煮物の味がなじむのを待つあいだに空の写真を撮ろうと、エプロンのポケットからスマホを取り出した。カメラを起動させてリビングの一面の窓から西の方へ半分ほど体を乗り出し、シャッターを切った。

何枚か撮っているうちにも空の色は濃く深く蜂蜜に満たされていく。

冬の黄昏時の短さがどこかわびしく感じた。

暦の春は肌で感じる季節より遠く、二月の冷たい風に鼻がツンとする。ひんやりとした空気が頬を撫でて身震いが軽く走り窓を閉めた。ソファに腰を下ろしてスマホのフォト一覧をスライドしながら眺めた。遠くで十六時半を知らせるチャイムが聞こえる。もう少しし

たら炊飯が完了する頃かしら。夕飯の段取りを考えつつ画面に表示される写真をつい何枚もめくる。

このところ出掛けることがめっきり減って、スキマ時間を無駄にしない！　なんて意気込みは空気の抜けた風船みたいになっている。ほんの少し手持無沙汰な時間ができると返信を送ったりこうしてフォトを見返したりするのが癖のようになっていた。

タイル状に並んだまま写真を見つめて空が多いなあとしみじみした。ときどき一枚を画面全体に表示させてアルバムを繰るように撮った時のことが思い浮かんでくる。

「あ、これ広尾の空だ」



スクロールしていた指が止まった。久しぶりにあの人と待ち合わせた日の、改札を出たときに目に入ってきた景色は冴えるような青だった。

「嬉しくてはやく着きすぎちゃったんだよね」

独り言をもらしながら口元がゆるむ。「我ながら思春期の少女じゃあるまいし」と苦笑いしつつ、けれども駅の階段を上がる足どりは軽かった記憶が舞い戻ってくる。

ああこの写真は書店に寄った時——商店街で買ったお魚のためにレシピ本を探していた日の夜空だった。



画面をスライドしていくと次々に広尾の写真がでてくる。こっちはあの人一緒に家へ帰るときに眺めた散歩通りを染めていく夕焼け。

こんなに撮ってたんだっけ、と一瞬驚くけれど、思い返せば広尾のカフェであの人の仕事終わりを待つことが多かった。あ、そうこれだわ、とちょうど表示された一枚を眺めた。

こちらの仕事が長引いて、あの子のほうに先に待っていた日にこっそり撮ったことがあった。窓際の席でコーヒーを飲みながら本を読んでいる姿は構えたところがなくどこか無防備な横顔があって、けれどもあの子らしい真面目な眼差しを頁にそそいでいた。ふふっ、と笑みがもれる。あったかい気持ちが広がって画面をそっとなでれば指につられて写真がすこし拡大される。

「あれ、いつのまにそんなの撮ってたの」

「ひゃ」

いきなり近くで声がして見れば、彼が後ろで照れたような表情をしている。視線は私のスマホに落ちていた。

「わ、もうこんな時間？ オンライン会議、お疲れさま」

会議を済ませて自室から出てきたとあって、「ありがとう」と笑う彼には疲れの色がどことなく浮かんでいる。

思い出に浸っていてすっかり十七時を回っていた。空は群青色に変わっている。

「なんかこういう姿、撮られてると思ってなかったんだけど、その、うん……」

口ごもる彼は頭の後ろを掻きながら窓の方を向いて、わずかにすねているようにも見える。カメラ視線ではなく様さまになっていないし消してくれ、なんて思っているのかしら。

そんな様子にさえ頬がゆるんでしまう。

「また広尾でお茶、しようね」

笑いかければ彼もはにかんだ。

完

作 天風 凜 (あまかぜ りん)